
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 101

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 2001. 福永武彦氏の小説作品
- 2002. 壁打ちの夢
- 2003. 大阪にいた頃
- 2004. 家畜化される現代人
- 2005. 音楽のアルファポイントと自己組織化能力
- 2006. 犬の走法と創作特性
- 2007. 冬季休暇最後の日曜日
- 2008. 届けられた書籍たち
- 2009. 時の流れと存在の杭
- 2010. 幸運の通り道
- 2011. 楽譜のスキヤフォールディング効果
- 2012. ハワード・ガードナー教授の書籍から
- 2013. 今年最初の研究ミーティング
- 2014. 発達プロセスと真善美
- 2015. システマティックレビューの最終課題
- 2016. 誕生地点から終着地点へ、そしてその向こう側へ
- 2017. システマティックレビューの最終回のクラスを終えて
- 2018. 教育研究の動向
- 2019. 静謐な感覚
- 2020. マルチレベル分析

2001. 福永武彦氏の小説作品

早朝の空と同じような色を持つ空が今この瞬間に広がっている。それはどこか寂しげな空であり、灰色の衣を身にまとっている。

今日は太陽が顔を覗かせることはなく、ただこの灰色の空が世界を独り占めにしているだけだった。今日は一回も外に出ていないから外の寒さはわからないが、どうもそれほど寒くなさそうにも思える。昨夜に雨が少々振っていたためか、確かに最低気温は低いのだが、体感温度はそれほど低くないように思える。しかし、それらはすべて室内にいる私の単なる憶測に過ぎない。実際に外に出てみれば寒いかもしれない。憶測と現実との差はいかほどだろうか。

今日の午前中は昨日に引き続き、昨日とは異なる協働者の方とオンラインミーティングを行った。明日もまた一時間ほど別の協働者の方と打ち合わせをする。

他者との協働、学術研究、文章の執筆と作曲。日々の全てが自分の仕事の重要な部分であり、それでいて全体としての仕事でもある。仕事というのは本質的にフラクタル構造を持つものらしい。

午前中、ドビュッシーが執筆した美学に関するエッセーを読み進めていた。今夜も全ての仕事がひと段落したらまたそれに取り掛かりたい。だが、そのエッセーよりも今この瞬間の私を捉えて離さないのは、福永武彦氏の小説作品である。このところ毎日福永氏の何かしらの作品を読み進めている。

ちょうど先ほど、『草の花』が収められた全集に掲載されている全ての作品を読み終えた。夜の作曲実践に入る前に、今日はこれから『忘却の河』という長編作品を読み進めていく。

私の読み物の中に学術論文、科学や哲学の専門書のみならず、小説が入り込んできたことは嬉しい出来事である。これまで小説を読むことができなかった私からしてみれば、今このようにゆっくりと福永氏の作品を読み進めていることは驚きである。しかしながら、よくよく考えてみると、その理由は明らかなものに思える。結局私は、自分を捉えて離さない主題と同様のものを、魂から湧き上がる言葉でまとめ上げてくれた一連の物語を求めていたのだ。

福永氏の作品はまさにそれに違いなかった。だからこそ私は、実家から10冊ほどの福永氏の全集を必ず欧州に持ち帰らなければならないと直感的にわかっていたのだと思う。

灰色の空の下、これから私は『忘却の河』を読み始める。この作品がどのような内容なのかについては事前の知識は一切ない。全て白紙の状態でこの作品世界の中にこれから入っていく。この作品世界の中に入った後の私は、もはや今の私ではなくなっているだろう。フローニンゲン:2018/1/12 (金)16:12

No.636: Visible Small Progress

I was almost there. I thought so when I composed a new work.

I've recently read one of Schoenberg's textbooks. One example in one of the books about how to create harmony was very helpful. I composed a small piano work based on the example.

The first four measures sounded harmonious and melodious, yet the rest of the work seemed to lose melodious beauty, though it kept harmonious beauty. A new challenging to me is to make an arresting coherent story in music. Groningen, 14:55, Friday, 1/12/2018

2002. 壁打ちの夢

「ドーン」「ダーン」と壁にボールを打ち付ける音が聞こえる。サッカーボールは軽いのに、それが壁に打ち付けられる音はどこか重たい。

夢の中で私は、サッカーゴールに似た壁に向かってボールを蹴りつけていた。利き足ではない左足で何度も何度も壁に向かってボールを蹴っている。それもその場に静止している状態で蹴るのではなく、空想上の相手を目の前に置き、何度も違うフェイントを試し、何度も違う脚の角度でボールを蹴り続けていた。

目の前の相手をフェイントで一瞬翻弄し、シュートコースを一瞬作った上でキーパーに取られない場所にボールを蹴り込む。一つ一つのシュートは一切の放物線を描くことなく、どれもが直線的な光線のようにであった。

ボールが壁に当たる音は、私の耳にとっても心地よかった。そして何より、空想上の相手を種々のフェイントで翻弄し、光の矢のようなシュートが壁に向かって、想像上のゴールキーパーの手の届かないところに進んで行く軌道は美しく、その軌道を眺めることは芸術作品の鑑賞にも似た美的感覚を私にもたらしていた。私が何度も何度も一人で壁に向かってボールを蹴っていたのは、この恍惚感によるものに違いなかった。

壁に向かって何度も左足でシュートを蹴り込んだ後、最後に私は自分の利き足でボールを蹴ることにした。さすがに利き足だけあってか、フェイントもシュートも、左足で行うものよりも精度が高く、一連の動作が完全な流れの中で進行し、最初の動作から最後の動作までが全てイメージ通りのものだった。

「ドーン」と壁にボールがぶつかった。最後に蹴ったそのボールは、力強く壁に跳ね返り、私の後ろの方に跳ねるようにして転がっていった。ボールは道の上を弾みながら近くの家ガレージに入っていた。弾んだボールがガレージの車にぶつかる音が聞こえ、ガレージのシャッターにぶつかった。その音は少しうるさく、その物音によってそこに住んでいる人が何事かと言わんばかりに顔をのぞかせた。

私:「すいません。ボールがガレージに入ってしまったようで」

その家の年老いた主人:「ああ、ボールかね。ガレージの方で何か物音がしたもんだからちょっと気になって」

私:「すいませんでした」

その家の年老いた主人:「謝らなくてもいいんじゃないよ。そう言えば君、知っとるか？」

私:「えっ、何をですか？」

壁にぶつかって弾んだボールが紛れ込んだ家の主人は、かなり年配のようであり、私がボールを拾って謝ろうとした時に、何かを尋ねてきた。しかし何を尋ねようとしていたのかを聞こうとしたところで夢の場面が変わっていた。

自分のようできて自分ではないような、小さな少年が大人に混じってサッカーグラウンドを駆け回っている。どうやらそれはプロの試合のようだ。まだ小学生の低学年ぐらいの小さな少年は、成人のプロサッカー選手に混じっても何の遜色もない技術を持っていた。いや技術に関しては、プロの選手よりも抜きに出ていた。

その少年が左サイドで相手を一人かわし、クロスボールをゴール前に送った。ファーにいた仲間がヘディングでさらにゴール前に折り返し、その折り返しを別の仲間がゴールに押し込んだ。ゴールが決まった瞬間に、コートの中の選手たち、そしてそのチームを応援していたサポーターは熱狂的な喜びを示した。その小さな少年が相手をかわし、クロスを送ったことがゴールに繋がったことをチームメイトは理解しており、一人の体格のいいブラジル人の仲間がその少年を抱き抱えてその貢献を讃えた。

チームメイトも少年も満面の笑みを見せている。そのブラジル人が少年を抱き下ろすと、チームメイトが一様に少年の元に駆け寄り、少年の頭をくしゃくしゃと撫でていった。コートの中でひときわ小さいその少年は、逆にその存在感が人一倍強かった。チームメイトに讃えられた少年は、溢れる笑顔で自陣に戻り、試合の再開に向けてまた気を切り替えようとしていた。

その試合についての結果を伝えるテレビ番組だろうか。サッカー競技場を背にした形で何人かのリポーターが立っている。一人のリポーターは、先ほどの少年と同じぐらいの年齢の韓国人の少年だった。その少年は間違いなく韓国人なのだが、流暢なドイツ語を話し、自分の観点を交えて試合結果を見事に伝えている。その横にいたのは、少しばかり年のいった経験豊富な韓国人女性のリポーターであり、彼女は韓国語で試合結果を伝えている。その場所から少し離れたところに、日本人の女性リポーターがいた。彼女はリポーターというよりも通訳らしく、風貌から察するにベテランの域に達していそうだった。おそらく彼女の役割は、少し離れた場所で喋っている二人の韓国人のリポーターの言葉を英語に翻訳することだった。

その日本人女性は、少年リポーターのドイツ語を翻訳しているのか、それとも少年の隣にいた女性の韓国語を翻訳しているのか定かではなかった。その日本人女性の通訳は、第一声から言葉を詰まらせ、最初のセンテンスを締めくくる言葉が何も出てこないようだった。番組を見ている視聴者は、おそらく音声途切れてしまったのではないかと思うぐらいの沈黙がそこにあった。私は、何度も同

じセンテンスを言い直そうとしているその通訳の女性の姿を少しばかり憐れむ気持ちで見ている。

フローニンゲン:2018/1/13(土)06:05

No.637: Feeble Self-Organization and Dichotomy between Parts and a Whole

I noticed that my musical works lacked the potentiality of self-organization. It means that they do not spontaneously develop themselves. I need to tackle this issue about the feeble power of self-organization. Also, I can find a dichotomy in my musical works between parts and a whole. This is another matter required to address. Groningen, 19:41, Friday, 1/12/2018

2003. 大阪にいた頃

今も脳裏に夢の中の光景が焼き付いている。それは光景だけではなく、夢の中の感触もそのままリアルにこの瞬間の自分の中で生きている。特に、夢の冒頭で、私が一人でボールを壁に蹴りつけている時の一つ一つの感覚は極めて鮮やかに内側に残っている。そういえば、私は社会人になってからも、夢の中での壁打ちと同じようなことをしていたことを思い出した。

東京の大学を卒業し、大阪で働き出した時、私は新大阪のタワーマンションに住んでいた。そのマンションの真ん前には大きな公園があり、休日には野球をしている人たちをちらほら見かけた。

私は平日の朝、会社に行く前にその公園でボールを蹴っていたことがある。時には仕事を終えて、その公園で一人壁に向かってボールを蹴っていた。しかし、夢の中にあるようなサッカーゴールに似た壁はその公園にはなく、野球用のフェンスの下についているおよそ1メートルほどの大きさの壁があったにすぎない。

私はその幅の狭く細長い壁に向かって延々とボールを蹴ることが好きだった。夢の中にあつたように、想像上の相手を目の前に置き、様々なフェイントを試しながら壁に向かってボールを蹴っていた。しかしそれ以上に、一切のフェイントをいれることなく、壁から跳ね返ってきたボールをまた同じ場所に向かって淡々と蹴ることが何よりも好きだった。

マンションの管理人:「加藤さん、こんにちは」

私:「こんにちは」

マンションの管理人:「お部屋で何をされてますか？下の階の方から時々何か激しい物音が聞こえると苦情が来てます」

私:「あっ、すみません。もしかするとサッカーのことですか？」

マンションの管理人:「サッカー？」

私:「ええ、時々サッカーの練習をしています」

マンションの管理人:「えっ、部屋の中で？」

私:「ええ」

マンションの管理人:「それはあかんでしょう(笑)」

私:「あかんでしたか？(笑)」

マンションの管理人:「あきまへん(笑)」

私:「すみません、今度から目の前の公園で練習します」

いつかそのようなやり取りがマンションの受付の前でなされた。その時もさすがに部屋でシュートを打つことはなかったが、部屋の広さはドリブルとフェイントの練習するには適していた。そこでも想像上の相手を目の前に置き、ある時練習に熱を出しすぎて、ボールが食器棚の方に激しく転がっていき、そのガラス扉が割れたことがあった。割れたガラス片を拾いながら、自分の仕事は別にあるのに、なぜ一人サッカーの練習に熱を上げているのだろうかと思いがこみ上げてきた。

マンションの管理人から指摘があつて以降は、自分の部屋でボールを触ることを極力控え、足の裏で撫でる程度にとどめ、目の前の公園で練習することにした。

「ドーン」「ドーン」と何度も壁に打ち付けられてこだまするボールの音はとても心地よく、今でも私の記憶に鮮明に残っている。それどころか、何度も壁にボールを打ち付ける際の動作の感覚が足に残っているのである。とりわけ、蹴る瞬間、ボールと足の甲が当たる感覚は恍惚的であり、今でも時々あの感覚を感じたいと思う時がある。

サッカーゴールに似た壁が近所があれば、私は再びシューズとボールを購入し、壁に向かって一人で延々とボールを蹴ることをし始めるかもしれない。そんなことを考えながら、オランダに戻ってきってから最初の土曜日の活動を開始させようと思う。フローニンゲン:2018/1/13(土)06:32

No.638: No Talent but Full of Gifts

I think that I don't have sufficient persistence to compose a piece of long music. However, I convince myself that I have abundant endurance to create an infinite number of small pieces of music. It implies that I don't have any talent but have full of gifts for music composition.

As is the case for novelists who specialize in writing not a long story but a short story, I'll devote myself to creating a flood of small pieces of music. I'll not pursue one massive work but strive for generating a limitless number of works that can become one gigantic work someday. Groningen, 19:56, Friday, 1/12/2018

2004. 家畜化される現代人

大阪に住んでいた数年前のことを先ほど思い出していた。大阪に住んでいたのはもう八年から九年ほど前のことになる。その年数を考えてみると、大阪に住んでいたのはそんなに前の出来事だったのかと不思議に思う。ちょうど昨日は、ニューヨークの郊外に住んでいた五年前のことを思い出していた。

ニューヨークの郊外には整った住宅環境がたくさんあるが、私が住んでいた場所はそれほど優れた居住環境ではなかった。ニューヨークに移る前に住んでいたカリフォルニアのベイエリアにも様々な居住環境があるが、私が住んでいた場所は極めて治安も良く、見事に整備されていた住宅地の中

に家があったため、最初ニューヨークのその場所で生活を始めた際には多少なりとも違和感があった。

私が住んでいた住宅エリアの隣のエリアには、アフリカ系の人たちが多く住んでいた。当然ベイエリアには様々な人種の人たちがいるし、特定の人種が集まっている生活区があるのは確かだ。しかし、実際に私がそのような場所に住んだことはなく、同じ人種の人たちが、しかもアフリカ系米国人がこれほどまでに集まって生活をしている場所と目と鼻の先で生活を営むことに違和感があった。

その居住エリアを歩いて通らざるをえない時が何度かあり、最初のうちはやはり大きな違和感があったことを認めざるをえない。もちろんそれはそこで生活を営んでいる人たちに対してでもあったが、一番は自分の異質性に対するものだった。そのエリアには日本人はおろかアジア系の人は誰一人として住んでいないようだった。そこはアフリカ系の人たちが住むためのエリアとなっており、日本人がその辺りを歩くことはとても奇異な光景に見えた。

ニューヨークに住んでいたわずか半年間の期間にそうした違和感は徐々に薄れていったが、最初に感じた何とも言えない粘着質のある重たい感覚は、今も自分の腹部辺りに感じるができる。あの感覚の本当の正体は何だったのであろうか。それはきっと、自己と他者の問題と関係しているだろうし、存在が持つ究極的な孤独さと独自性の問題と関係しているだろう。

昨日は一つ大きな発見をした。それは、テレビの画面の映像の切り替え速度は極めて早いということだ。昨日の夕食前に食卓から外の景色を眺めていると、通りを挟んで向こう側のレンガ造りの家々の一室の中に、ちらちらと変化する閃光のようなものを見つけた。それはどうやらテレビの光だった。

私はその時初めて、テレビの一コマ一コマがあれほどまでに非連続的に変化しているのだと知った。おそらくテレビを見ている当人は、その慌ただしい非連続の光に気付くことなく、テレビに映る光景が連続的に知覚されているに違いない。言葉は悪いが、やはりこのような刺激に無自覚にさらされ続けているのは家畜同然なのではないかと思う。思考を停止させるような刺激を与えられ続けているというのは、家畜の調教のように思えて仕方なかった。なぜそのような性質を持つテレビを見る人

がいるのかは、はなはだ疑問に思うことがあるが、それは現代人が家畜化されつつあることを暗に示している。

テレビのみならず、私たちの身の回りには過剰な刺激が溢れている。とりわけ昨今は、情報刺激が多すぎるように思える。それらの具体例についてはあえて列挙しない。それらの情報刺激に無自覚に晒され続けている限り、人間らしい生など営みようがないように思えるのは私だけだろうか。フローニンゲン:2018/1/13(土)07:07

No.639: A New Habit

As well as my penchant for paintings, I have a strong affection for exquisite music scores. Beautiful music scores fulfill my soul eyes. Well, I'll make a new habit of seeing aesthetic music scores before going to bed. Groningen, 20:38, Friday, 1/12/2018

2005. 音楽のアルファポイントと自己組織化能力

夕食前の入浴中に思考が完全に止む無の状態に陥った。それは突然やってきた。

いつものように浴室で音楽をかけようとし、私はバッハの曲を選択した。バッハの音楽が高らかに鳴り始めたのと同時に、私は浴槽に浸かった。すると突然、思考が完全に消えた。思考が音になったのである。

言葉は完全に止み、音だけが思考空間の中を漂っている。普段頭の中のおしゃべりは止むことを知らないが、その時は完全に思考が黙っていた。そこにあったのは本当に音だけであった。

意識の状態というのは本当に不思議なものである。それは確かに一時的な仮の現象なのだが、一瞬にして私たちはそれまでとは全く異なった意識のスペクトラムに入ることができる。私が浴槽の中で経験した意識状態は、おそらくかなり深い瞑想状態のようなものであったに違いない。思考が完全に止み、音楽だけが意識の全領域を占めている時間は長くなかったが、ふと我に返ったときに、音楽が生まれる出発地点のようなものを掴めそうになっていたように思う。それは音楽の「アルファポイント」と呼ばれるようなものであった。残念ながら、私はそれを完全に掴んだわけではない。ただし、その一端を掴んだ、もしくはその一端に触れたという確かな余韻が残っている。今回の経験は、

瞑想と音楽、そして意識と音楽との関係性についてさらなる探究をしていこうという思いを喚起するには十分であった。

今日は一日を通して、多くの時間を作曲実践に充てることができた。来週から再び大学が始まるが、基本的に今後の週末は今日のような形で時間を過ごしたいと思う。平日はやはり学術研究に時間を充て、わずかの時間でもいいので作曲実践も行う。週末はできるだけ多くの時間を作曲に充てる。そのような形で来週からの生活を形作っていく。

昨日、自分の曲が持つ自己組織化の力はまだまだ脆弱だと思われた。曲というのは不思議なもので、本当に命があるようなのだ。しかもそれは自己生成的に発展をしていく力を内在的に持っている。どうやら私はまだその力の引き出し方を分かっておらず、どうも曲の生成力を殺してしまっているようなのだ。そのため、曲の発展の形が歪であったり、曲の発展がままならぬ形で曲が終わってしまうということが生じる。今後は、曲が内在的に秘めている自己生成力をいかに促進していくかに焦点を当てていきたい。

それに合わせて、自分の曲にはまだ部分が一つの全体に変容する姿を認めることが難しい点にも着目する必要がある。つまり、部分部分が一つのまとまりになることなく分離したままの状態であることが多いということだ。

部分が一つの全体になることも自己組織化の力と密接に関わっているため、これは上記の問題と本質的には同一のものなのかもしれない。曲が宿している生命があるべき姿に発展していくことを妨げることなく、その力を活かす術を習得していきたい。それができれば、一つの躍動する生命を帯びた曲が生まれてくるに違いない。フローニンゲン:2018/1/13(土) 19:52

No.640: Uncrossing Flows

There are uncrossing flows in our life even though they seem to cross each other. The fact might cause a forlorn feeling, but it plainly represents the core of our life. Groningen, 08:59, Saturday, 1/13/2018

一見くだらないように思えるかもしれないが、昨日は一つの真剣な問いに捕まっていた。それは、犬はいかように走るのか、という問いだった。そもそもこの問いが立ったのは、数日前にランニングに出かけた時、犬の散歩をしている何人かの人たちとすれ違ったことがきっかけになっている。私の記憶では、犬は人間のような形で前後左右に足を動かす歩行運動をしているはずだが、走る時は違うのではないか、という疑問が浮かんできたのである。

私の頭の中に犬の走る姿が表象イメージとして現れ、その迫力ある絵図は、人間の走り方とは異なる犬の姿を映し出していた。そのイメージが示していたのは、犬は走る時には前足を同時に蹴り出しているというものだった。歩くときと走る時の動作が異なるというのはなんと器用なことだろうか。私は頭の中で、犬のように人間は走れるのかを想像していた。

どうやらその可能性は低いようだ。この問いに対しては、実際に次にノーダープラントソン公園へ出かけた時に、走っている犬の姿をじっくり観察したいと思う。

曲を作ることに耐性。昨日、ドビュッシーが執筆した美学に関するエッセーを読んでいた時、「ショパンは才能のある作曲家だが、彼の性質上、ソナタのような長い形式の曲を書く耐性に乏しい」という記述に目が止まった。

ショパンに敬意を表しながらも批判を加えるドビュッシーのその言葉を二度ほど繰り返して読んだ時、自分もソナタのような形式を書く資質は一切持ち合わせていないと思った。そのような長い曲を書く耐性は私にはないということが、もしかするとショパンに惹かれていることのひとつかもしれない。日記のように作曲をしたショパンを一つの規範としているのはまさにそのためだろう。

私には長編小説は書けない。だが、短編小説なら無数に書くことができるような気がしている。もちろん、ここで言う「小説」とは音楽のことを指しているが、私はどうも長大な曲を書く資質も能力もないということがはっきりわかってくる。しかし、多種多様な短い曲であればどこまでも書き続けられるような気がするのだ。もしかすると、それが私の音楽特性なのかもしれない。あるいは、それは音楽だけに限らず、他の創作活動全般に当てはまることなのかもしれない。

今このように書き綴っている日記も一つ一つは決して長いものではない。ただし、そうした小さな文章を無数に書き続けることが私にはできる。

自らの存在をかけて長大な作品を残すことは本当に尊いことであり、多大な価値を持つことであるが、自らの存在をかけて小さな作品を膨大に残し続けることにも尊さと価値があるのではないかと思う。自分がどちらの道を歩むかはもうはっきりしている。フローニンゲン:2018/1/13(土)20:11

No.641: Ever-Never Loneliness

From birth to death, we are always lonely and not alone always. Endless loneliness is our destiny, and our everlasting never-loneliness is absolute happiness in our life. Groningen, 10:25, Saturday, 1/13/2018

2007. 冬季休暇最後の日曜日

明日からは、フローニンゲン大学での二年目の生活の折り返しの節目となる。早いもので、オランダで過ごす二年目の生活も半分がすでに過ぎ去り、残りの半分がこれから始まろうとしている。

冬季休暇はそれほど長くないと思っていたのだが、結局一ヶ月ほど休暇があったことを今初めて知る。大学に所属していると夏季休暇が極めて長く、去年は六月の第三週から休みに入り、次に大学が本格的に始まったのは九月の第二週目であった。夏には三ヶ月弱の休みがあり、冬には一ヶ月ほどの休みがあるということは、私のように種々の探究を独自に進めていきたいと思う者にとっては非常に恵まれたことだと思う。今回も冬の休暇の期間中には随分と探究の幅と深さを広げていったように思う。

冬季休暇を活用して、作曲理論の学習と実践を旺盛に行い、それに合わせて文学作品にも触れることができた。普段の科学的な探究から意識的に距離を置き、哲学や芸術領域を歩き回ってみることで、また新たな眼が開かれたように思う。

ここから六月の半ばまでは長期的な休みはなく、一定のペースで科学的な探究を進めていきたい。日本企業との協働プロジェクトの中で三月末までに佳境を迎えるプロジェクトが二つほどあり、フローニンゲン大学のMOOCチームとの協働も始まるため、ここからの二ヶ月間は密度の濃いものになる

だろう。生活を形作るそうした諸々の事柄は、まさに私の日々そのものである。絶えず自分のなすべきことをしながらも、ゆとりと調和のある日々を送っていく。

今日は本格的に新たな学期が始動する前の最後の日曜日である。これから午前中に、“Three Classics in the Aesthetic of Music (1962)”の続きを読む。本書はタイトルにある通り、音楽に関する美学を扱っている評論集である。私はてっきりドビュッシーだけが著者だと思っていたが、その他にも数名の作曲家が評論を書いており、正直なところ、ドビュッシーの文章よりも彼らの文章の方が面白い。

本書も残り60ページほどとなり、午前中に本書を読み終えることになるだろう。本書を読み終えたら、次に取り掛かるのはアーノルド・ショーンバーグの書籍を基にした作曲実践である。ショーンバーグの“Fundamentals of Musical Composition (1967)”は得るものが多く、掲載されている具体例を発展させる形で自分の曲を作っていくという実践に従事している。それを今日も行っていく。

昨日はフォーレの楽譜が届いた。他の作曲家たちの楽譜と合わせて、研究的な意味合いと鑑賞の意味合いを込めて、時間を見つけながら楽譜を眺めていきたい。

作曲実践がひと段落すれば、福永武彦氏の『忘却の河』の続きを読み進める。オランダに戻ってきってから、夕食後に頭の働きが鈍くなることが続いているため、上記の事柄は全て夕食までに行いたい。夕食後にリラックスした形で行えることが何であるかは、これから模索していく必要があるかもしれない。フローニンゲン:2018/1/14(日)06:46

No.642: Small Progress of Harmony

I'm glad to see the small progress of my techniques of harmony. Although I haven't fully grasped the principles of harmony, I suppose that I have comprehended a part of them. I'll continue to learn from actual examples how to create harmony. Groningen, 18:18, Saturday, 1/13/2018

2008. 届けられた書籍たち

今日はとても冷える一日である。相変わらず部屋の中はとても暖かいのだが、外気の温度がいかにせん低い。おまけに太陽が顔を覗かせることはなく、早朝からずっと曇り空である。そんな天気の中、

昼食後、近くの郵便局に足を運んだ。注文していた書籍が数日前に届いたらしく、その時は不在であった。郵便局から配達があった旨の紙が玄関に置かれており、私はその紙に記載されている郵便局に向かった。

以前にも書き留めていたように、オランダの郵便局は日本と異なり、郵便局なる物理的な場所は基本的に存在しない。おそらく、街のどこかに配送センターのような場所があるだけであり、郵便局の機能は基本的にスーパーや雑貨屋が請け負う。

先日届けられていた紙に記載されている場所はスーパーだった。昼食後、寒空の中をランニングがてら走って目的のスーパーに向かった。指定されていた場所は家からほんの数百メートルのところにあり、走っているとあっという間に到着した。「こんな場所にスーパーがあることは知らなかった」というぐらいに、普段通らない住宅地の中にひっそりとその小さなスーパーは佇んでいた。

このスーパーには初めて来たため、本当に郵便物がここにあるのか若干不安であったが、スーパーの表示板の横に郵便局マークが付されていたのを見て大丈夫だろうと思った。スーパーの中に入ると、そこには買い物客はほとんどいなかった。レジを担当している人も一人の男性だけであり、ちょうど私が到着した時に、一人の客のレジが終わったところだった。私はすかさず、レジの男性に声をかけた。

私:「郵便物を受け取りに来たのですが」

レジの男性:「わかりました。ただ、今日は日曜日ですから、昨日の郵便物であればまだこちらに届いていないかもしれませんよ」

私:「そうですか」

レジの男性:「ですが、保管場所を確かめてみますね」

私:「ありがとうございます」

レジの男性:「いえいえ。ええっと、お名前は・・・」

私:「カトーです」

レジの男性:「今日は休日なのでもしかしたらまだ届いていないかもしれませんね。さて、どこにあるかな・・・」

私:「郵便物は本です」

レジの男性:「本ですか・・・ああ、ありました！」

郵便物が保管されたそれほど大きくないボックスから、レジの男性は私の郵便物を見つけ出してくれ、それを手渡した。

レジの男性:「それにしても重い本ですね(笑)」

私:「ええ、そのようですね(笑)」

届けられたのは二冊のハードカバーの専門書だった。私は二冊の書籍を脇に抱え、レジの男性にお礼を述べてスーパーの外に出た。

確かに今日は底冷えのする天気だが、新しく本が届くときはいつも期待感に胸が踊る。自宅に帰てみると、もう一冊ほど郵便受けに書籍が届いていた。自宅の玄関の鍵を開け、すぐにそれらの書籍の包みをほどいた。一冊は、ボストンにあるバークレー音楽大学が出版しているリハーモナイズーションに関するテキストだった。実はこの書籍は今から二週間前に届く予定だったのが、それが届いておらず、今日の夕方にもアマゾンに返金依頼の連絡をしようと思っていたところだった。スーパーで受け取った二冊の書籍のうち、一冊は、ハワード・ガードナーが今から45年前に出版した“The Arts and Human Development (1973)”という書籍である。この書籍は、芸術と人間発達について扱っており、まさに今の私の関心と強く合致している。そしてもう一冊は、ガブリエル・フォーレの手紙が収められた書籍である。

ちょうど昼食前に、これからは書物を読むことよりも文章を書くことや曲を作ることを最優先にさせようと思っていたのだが、やはり自分の関心を強く弾く書籍だけは継続的に読み進めていきたい。無

駄に書籍を読むのではなく、内側の求めに応じて書籍を読んでいく。そのようなことを心がけて、ここからまた日々の探究活動に少しばかり差異を生み出していきたいと思う。フローニンゲン:2018/1/14(日)15:18

No.643: The Alpha Point of Music

A state of mental detachment suddenly occurred to me when I was taking a bath. I had no thoughts, but just Bach's music was floating in my mind. I was listening to Bach's music; or I can say that my mind completely united with his music. The state of my mind was deeply meditative. I was almost able to grasp the Alpha Point of music. It was almost... Groningen, 19:28, Saturday, 1/13/2018

2009. 時の流れと存在の杭

一日が過ぎていくというのはこれほど早いものであったろうか。そのようなことを思わずにはいられないほどに、時の流れが極めて早く知覚される。

私が毎日日記を執筆したり、日記のような曲を作っているのはもしかすると、時の激流に押し流されないようにするためなのかもしれない。存在を時の流れの中に定位させ、時と共に一日一日を確かに歩んでいこうとする意思ゆえに、私はこうも毎日日記や曲を作ることに邁進しているのかもしれない。本当に、そのような形で一日を過ごさなければ、この時の流れに流されてしまいそうなのだ。それは自己を流れに委ねるという形ではなく、自己が流れの最果てにあてもなく流れ去ってしまうかのようなのだ。

日々を生きるということが、日々の時の流れに一步を刻むことであるならば、日記を書くことと曲を作ることは、時の流れの中に存在の杭を打つことになる。その一つ一つの杭が、生きた証になるのではないだろうか。

今私が住んでいるオランダの家からは、毎朝小鳥の鳴き声が聞こえてくる。今朝もそうだった。小鳥たちの鳴き声に耳を傾けていると、どこか瞑想的な意識に誘われるから不思議である。もしかすると、

鳥は仏陀の化身、あるいは仏陀そのものであり、その鳴き声によって私たちが目覚める時、私たちも仏陀になると言えるのではないだろうか。

小鳥の小さな鳴き声は、自らの仏性に目覚めさせるきっかけを与えてくれるかのようだ。夕暮れが迫ったこの瞬間にも、耳を澄ませてみると小鳥の鳴き声が聞こえる。書斎の中に響き渡るシューベルトの曲と相まって、それは内側の仏性を目覚めさせる覚醒の音楽となる。

早朝に作曲実践を行っている最中、現在を進む私たちの足取りについて思いを寄せている自分がいた。私たちの自己は絶えず揺れながらにして進んで行く。自己の存在が深まるためには、絶え間ない揺らぎが必要である。この話題もまた、これまで折を見て何度もこの日記に書き留めているように思う。

私たちが絶え間ない揺れの中を毅然として進んで行くためには、二つの方法があるかもしれない。一つは音楽の対位法のように、揺れとは逆向きに一步を踏み出していくことである。そしてもう一方は、耐震強度の高い建物のように、揺れと同方向に揺れながらにして進んで行くということである。揺れと逆向きに進み続けることは過酷であり、揺れと同方向に進み続けることもまた別の意味で過酷だろう。すると、絶え間ない揺れの中にはこれら二つの方法を超えて、中庸的な歩み方があるのかもしれない。それはどのように見つけることができるだろうか。おそらくそれは、絶え間ない揺れの中を自らが自覚的に一步一步進んでいくことを通じて見出されるだろう。

日々の自覚的な歩み。それこそが、絶え間ない揺れを包摂した形でこの生を生きることを可能にしてくれるはずなのだ。フローニンゲン:2018/1/14(日)16:16

No.644: Composing Music Based on the Same Motif

It might be interesting to compose music for the same motif again and again, for instance, a joy for life, the beautiful sky, etc. I'm curious about how my music develops for the same subject. Composing music again and again based on the same motif would reveal not only a developmental process of composition skills but also the development of the subject itself. Groningen, 06:20, Sunday, 1/14/2018

「ああ、今日という一日もまた終わりに近づいている」

自然とそのような言葉が私の口から漏れた。

夕方六時を迎える今は、もう辺りが闇に包まれている。辺りが闇にすっぽりと包まれているのと同じように、私たちの一日も何かにすっぽりと包まれているのではないかと思う。だからこそ、一日が過ぎ去るのが早く感じるのだ。私たちの一日一日は何かに包まれているに違いない。だが、その何かとは何であろうか。それを明示的に指摘することはしない。全ての人はそれが何かを知っているはずだからだ。

本日受け取ったハワード・ガードナーの書籍のページを何気なしにめくってみると、どうやらこのようなのだ。芸術と人間発達。

もはや私は自らに何も語る必要がないかのように、その探究に向けて歩き出している。いや、呼吸と同じぐらいにそれを近くに感じながら日々を生きている。

芸術の領域の中でもとりわけ音楽と人間発達に関する関心は日増しに募る一方だ。子供も成人も含めた音楽教育と人間発達。私はその探究に向けて今日もまた小さな一步を前に進めていたように思える。その探究に向けて、自分の内側は情熱でほとばしっているというよりもむしろ、全く逆の様相を呈している。今日の前に広がっている闇のように静かなのだ。それでいて、どこまでもその奥へ奥へと入っていけるかのような無限の奥行きを持っている。

人は人生を生きていく中で、「これだ」というものと幸運にも出会うことがある。私もたびたびそうしたものと出会う幸運に恵まれた。その幸運に運ばれるようにして私は会社を辞め、米国へ留学しに行った。それは今からもう、かれこれ七年前の話である。

それ以降の人生においても、私は幾度となく自分の人生の舵を大きく切るような幸運と巡り合ってきた。教育へ関心を持ったこと、作曲を始めたこと、そして今、芸術と人間発達を探究していくという意思が芽生えたのは、まさにそうした幸運が運んでくれたものだった。

そこでふと、「私は幸運と出会ったわけでも、幸運を得たわけでもなく、幸運の通り道になったのではないか」という考えが芽生えた。幸運の通り道。

どうやらこの世界にはそうした道が存在しているようなのだ。この考えは、対象を対象として切り離すことなく自己と完全に同一のものとみなす最近の私の内的感覚と合致している。

そうなのだ、ここでもまた合致している感覚があるのだ。合致する感覚、合点が行くという感覚の本質そのものに自分になりつつあるのを見て取ることができる。

対象との究極的な合一を果たす時、そこにはもはや対象など最初から存在しなかったことがわかる。あるのは世界のみ。世界のみなのだ。

私は仕事を「持っていない」ということが、究極的な仕事への端緒であることを知る。確かに私は今、大学で科学的な研究を行い、日本企業との協働プロジェクトなどの仕事をしている。それに加え、日々の日記や作曲すらも仕事の一部だと言えるかもしれない。しかしながら、それらの仕事を所有しているという感覚は一切なく、自己がそれらの仕事の通り道になっているという感覚だけが自分の内にある。

おそらくそういうことだったのだろう。一人の人間に付与された使命的な仕事というのは、こういうことを言うのだろう。それらの仕事の通り道に自分になれたということ、そしてそれらの通り道として日々を生き始めたということは、どれほど有り難いことだろうか。

目の前の闇が闇ではなく、光を包むさらに大きな光のように見える。フローニンゲン:2018/1/14(日)
18:12

No.645: Whisper of a Little Bird

I can hear whispers of little birds every morning outside the window. Listening to the mellifluous sounds, I'm always induced to enter a state of meditative consciousness.

We might be able to say that little birds are Buddhas, and that so we are if we awake by the whisper of a little bird for the truth of this reality. Groningen, 07:44, Sunday, 1/14/2018

2011. 楽譜のスキヤフォールディング効果

昨夜はいつも通り十時に就寝したのだが、今朝は随分ゆったりと起床した。七時前に起床し、そこからまずは英文日記を一つ書いた。それは、過去の名曲の楽譜を参考にしながら作曲することのスキヤフォールディング効果についてである。

私のように作曲を始めて間も無い人間にとって、過去の名曲の楽譜は多くの謎を残しながらも、常に新たな気づきを与えてくれる。そうした楽譜を参考にし、あれこれと様々なことを試しながら実際の曲を作ってみると随分と学びがあり、それが作曲技術をさらに高めることにつながる。楽譜を参照しながら曲を作るというのは、おそらく「最適レベル」に自分の作曲技術を引き上げてくれるような効果がある。当然ながら、楽譜からひとたび離れてしまうと、また元の技術レベルまで降りてきてしまうのだが、最適レベルに引き上げられるという経験を何度も経験しながら自分の作曲技術は少しずつ伸びていくようだ。

このあたりの成長メカニズムについては、拙書『能力の成長』の中で自ら説明しているにもかかわらず、改めて実体験をしてみると、スキヤフォールディングや最適レベルを体験する意義について再考を余儀なくされる。

楽譜が持つスキヤフォールディング効果は、何も私のような初心者のみならず、プロの作曲家にとっても重要になるのではないかと思う。楽譜を眺めることによって、作曲上の数々の発見があるのみならず、最も意味のあることは、そうした発見を超えたインスピレーションを与えてくれることなのではないかと思う。

楽譜の中にはその曲を作曲した者の靈感が宿っているのだ。だからこそ、楽譜を通じて靈感がこちらにやってくるのである。

私には楽譜から汲み取ることでできないことがまだまだたくさんあるが、逆に言えば、楽譜というのは無限に深い意味を持つ学習教材なのだろう。今日もこれからいくつかの楽譜を参考にしながら、また一つ自分の曲を作りたいと思う。フローニンゲン:2018/1/15(月)07:33

Our oscillating steps toward the future gradually become convinced. I wish to continue to take a resolute step while vacillating in continuous oscillations. Groningen, 08:30, Sunday, 1/14/2018

2012. ハワード・ガードナー教授の書籍から

今朝はいつもより遅く起床したにもかかわらず、いつもと変わらずに辺りはまだ闇に包まれている。七時半を迎えても、辺りは真っ暗のままである。ただしこの時間帯になると、通勤や通学で通りを行き交う人たちが闇の中で動いているのがわかる。

今日は月曜日であり、これから新たな週がまた始まる。今朝の起床時刻はいつもより遅かったが、昨日は夕食後から就寝までの時間にかけて作曲実践や読書を十分に行うことができていた。一昨日までは、なぜか夕食後に眠気に襲われることがあったが、それはおそらく時差ぼけの影響だったのだろう。

日本からオランダに戻ってきて一週間ほど経ってから、ようやく完全に時差ぼけが解消されたと言えるかもしれない。身体のリズムが崩れるのは一瞬だが、それを取り戻すにはかなりの時間を要することを身を持って経験した。

昨夜から、発達心理学者のハワード・ガードナーが執筆した書籍を読んでいた。これは今から45年ほど前に書かれたものであり、内容は芸術と人間発達である。まずは序文と目次を確認してみたところ、本書は今の私にとって極めて重要な意味を持つものであることが瞬時にしてわかった。特に序文に記されているガードナー教授の言葉には共感するものが多々あり、本書の意義を強く実感させるには十分であった。

幸運にも先日、ガードナー教授とメールでやり取りをする機会があり、彼は現在また新しい大きな研究プロジェクトに従事することになったことを私に教えてくれた。ガードナー教授は今年で75歳を迎えるが、まだまだ研究者として最前線で活動をしておられる。

ガードナー教授の過去の仕事を眺めていると、随分と研究テーマに変遷があることがわかる。もちろん、人間発達という軸は一本通っているのだが、人間発達を扱うテーマが様々なのだ。例えば、

本書のように、今から45年前は芸術と人間発達についての研究を進め、それとの関係で創造性の発達についても研究をしていた。現在は、道徳性と人間発達について研究を進めているようであり、実際にハーバード大学教育大学院で受け持っているコースもそのような内容になっている。

ガードナー教授が人間発達を軸に様々な領域の研究を行い、そうした研究を75歳という年齢まで継続していることは、研究者としての私にとって規範である。

昨夜、ガードナー教授の本書の目次を眺めながら、優先して読むべき項目に印をつけた。まずはそれらの箇所を丁寧に読んでいこうと思うが、本書は全体を通して非常に意味のあるものだと思う。

本書から伝わってくる靈感のようなものを感じるにつけ、この書籍は自分の人生の舵をまた大きく切るきっかけを与えてくれるような存在に思えて仕方ない。今日は午前中に、本書とじっくり向き合いたいと思う。

現在のガードナー教授の関心は、もはや芸術教育にそれほど置かれていないのかもしれないが、芸術と人間発達のテーマに関してぜひ実際にお会いして話をしてみたいものである。もしかすると、そのような日が近い将来訪れるかもしれない。フローニンゲン:2018/1/15(月)07:53

【追記】

上記の日記を執筆してから七ヶ月ほど経った頃だろうか。私は再びガードナー教授にメールをして、その年の秋にハーバード大学でお会いできるかどうかを伺った。その時はお互いのスケジュールが合わず、秋にボストンを訪れた際に面会することはできなかったのだが、ガードナー教授は、私の関心に合致する研究を行っている教授を何名か紹介してくださり、そのうちの一人の教授とお会いする機会を得た。その教授とは、ハーバード大学教育大学院の芸術教育プログラムのディレクターを務めているスティーブ・サイデル教授である。サイデル教授と直接会って、芸術教育についてあれこれ話を伺うことができたのも、ガードナー教授の紹介があつてこそだったのだ、と改めて思う。フローニンゲン:2019/1/13(日)09:57

No.647: The Afternoon On An Icy Day

Although there are various days in our life, today was a cold day.

In the afternoon on such a freezing day, I went to the nearest post office to receive books. One is “The Arts and Human Development (1973)” written by Howard Gardner, and the other is “Gabriel Faure: His Life Through His Letters (1984).” As long as I can engage in writing a journal, composing music, and reading books, I believe that I can embrace such an icy day in the “flame of my existence.” Groningen, 15:52, Sunday, 1/14/2018

2013. 今年最初の研究ミーティング

今日は昼食前から雨が降り始め、今も雨が降り続けている。年末年始に日本に一時帰国した際の、快晴続きの日々が幾分か懐かしい。しかし、今こうして降り続けている雨もそれはそれで趣きがある。雨の香りや雨の音、そして雨が生み出す雰囲気は、見方によっては大変趣き深いものとなる。

今日は夕方に、今年最初の研究ミーティングが行われた。これまでのミーティングと同じように、大学のカフェテリアで研究アドバイザーのミハエル・ツショル教授とグループメンバーのハーメンと三人でミーティングを行った。そこでの雰囲気は昨年を引き続き、非常にリラックスしたものであり、三人の意見交換はいつもと同じように活発だった。いよいよ研究計画を最終版にし、ここから研究が本格的に始まり出す。

振り返ってみると、昨年に在籍していたプログラムでは、研究が占める割合が今のプログラムのそれよりも大きかったため、研究計画を練る時期が早く、研究に着手する時期も今よりも早かった。今年のプログラムでは、二月から本格的に研究がスタートすることになる。

ちょうど今月末に、研究計画書を基にしたポスタープレゼンテーションが行われ、その日をもってして研究の本格的な開始となる。研究計画書のドラフトとポスタープレゼンテーションの資料は、日本に一時帰国していた際にツショル教授に送り、ほぼこのままの形で最終版にできそうである。ただし、今日のミーティングでいただいたフィードバックにあるように、データの計量観点をもう少し魅力的なものにしたいと思う。現時点では、MOOCのレクチャーが持つ変動性と学習者のオンラインコメントが持つ変動性を分析するために、センテンスの長さとコースに関係する概念の数を計量観点に置いている。

理想としては昨年の研究のように、カート・フィッシャーのダイナミックス理論を用いて、レクチャーとオンラインコメントの複雑性を分析したいのだが、昨年の研究で明らかになったように、コーディングシステムを構築するのが非常に手間であり、同時にそれがうまく構築できたとしても測定者間信頼性が担保できるかは不明である。昨年のそうした苦勞から、今回の研究では、計量観点はできるだけシンプルなものにし、その代わりに収集したデータに対しては、既存の教育研究ではあまり用いられることのない非線形ダイナミックスの手法を活用することを考えている。

今日のミーティングを通じて、センテンスの長さの代わりに、文章の中で特定の意味を持たない「終止ワード (stop words)」を計量基準にすることも良い候補だと思うようになった。というのも、既にツショル教授からも理解を得ているもう一つの計量基準と終止ワードは対の関係にあるからである。

センテンスの長さという計量基準がいかにもシンプルに見えたとしても、今回の研究の焦点は、得られた時系列データの変動性の背後にあるフラクタル次元を特定することであり、さらには、センテンスの長さのフラクタル次元が学習プロセスと学習成果の双方に思わぬ影響を与えている可能性があるため、センテンスの長さも計量基準として残しておこうと思う。そのため、最終版の研究計画書には、上記の三つの計量基準を盛り込んでおきたい。とりあえず明日は、終止ワードに関する文献を調査してみようと思う。フローニンゲン:2018/1/15(月) 18:03

No.648: Music Scores as Scaffolding

When I was composing music yesterday with reference to actual music scores of past great music, I thought that they had a scaffolding effect. The effect is very valuable not only for amateur composers but also professional composers.

For amateurs, actual music scores bolster their music composition skills, which can be called as an imitation effect. On the other hand, past distinguished scores would provide professional composers with profound insights and inspiration.

I'll continue to refer to past music scores from these perspectives. Groningen, 07:16, Monday, 1/15/2018

ポタポタポタとこの世界を静かに洗い流すかのような雨音が聞こえてくる。ぽつりぽつりと置かれている街灯が闇の中に輝いている。あの街灯を辿ればどこに行き着くのだろうか。そのようなことをぼんやりと考える。

今日は昼食中に、また一つ大切な考えに遭遇した。それは、「発達とは畢竟、善く生きること、美しく生きること、真実に生きることへのプロセスなのではないか？」という考えだった。

真善美のそれぞれの領域は固有の発達現象を持つ。つまりこの世界には、真の階梯、善の階梯、美の階梯が存在しているのだ。真善美の領域は、絶えず私たちの日々の生活の中に生きており、私たちはそれらと片時も離れることはできない。常に真善美と共に私たちが生きていることに気づいた時、発達プロセスの本質が見えたような気がしたのである。

その考えが浮かぶ以前は、発達と幸福との関係性について考えていた。確かに成達は幸福と結びつきうる側面もあるが、結び付かない側面もある。

幸福というのはもしかすると一時的な状態のようなものであり、それゆえに恒常特性を持つ成達と直接的に結び付かないのではないかと、という考えが脳裏をよぎっていた。残念ながら、私たちは四六時中幸福を感じることはできないのではないだろうか。

よくよく冷静にかつ正直に考えてみると、絶えず幸福感を感じているというのはどこか欺瞞に満ちていないだろうか。あるいは、常軌を逸しているとさえ言えることもあるのではないだろうか。例えば、愛する人がこの世を去った瞬間に、それを幸福だと捉えることができるだろうか。まっとうな感覚を持っている人間であれば、そこに幸福感を見出すことはできないだろう。

どんなに成達を遂げていたとしても、そこに幸福など見出せないはずなのだ。しかし、幸福の代わりに、真善美であればどうだろうか？愛する人の死の中に幸福を見出すことはできなくても、真善美を見出すことならば可能なのではないだろうか。死という現象に内包された真実、善なるもの、そして美。私はそれらなら見出せるような気がする。そのようなことを考えていると、やはり幸福というのは

状態特性を持つ現象であり、発達段階という永続特性を持つ現象とは完全に合致しないということがおぼろげながら見えてくる。

一方で、私たちはリアリティを構成する真善美の領域と不可分な形で生きているがゆえに、それらは発達現象と密接な関わり合いがありそうだと見えてくる。確かに発達は幸福と結びつくこともあるが、発達プロセスを幸福への道だと考えるのは乱暴である。他方、発達プロセスを、善く生きること、美しく生きること、真実に生きることへの道だと捉えることなら可能であるように思える。

雨が天から地上に降ってくるのに応じて、発達プロセスを捉える自分の考えの確からしさが存在の奥底に染み渡っていくかのようだ。フローニンゲン:2018/1/15(月)19:50

No.649: Sound of Start

From where is a sound born and where does it go? That is a profound question to me. It is a mystery of why a musical work starts from that sound and why it ends with the sound. I'll continue to unravel the mystery through the practice of music composition. Groningen, 09:06, Monday, 1/15/2018

2015. システマティックレビューの最終課題

昨日からの雨が今朝もまだしとしとと降り続けている。その雨音は昨日のそれよりも弱く静かだ。

雨が継続的に降っているのと同じように、昨日から継続的に今日がまたやってきた。そして、今日という一日はまた継続的な実践によって形作られる日となるだろう。

昨日の夕方に研究ミーティングがあり、そこから自宅に戻ってきてから、研究に関する考えをいくつか日記に書き留めていた。データを収集する際の計量基準だけが最後の課題であり、今のところ、以前に考えていた計量基準に新たなものを加える方向性でいる。予定では、最も有力な候補である計量基準について、今日の午後あたりに文献調査をしようと思っていた。しかし、おそらくそれは明日に回すことになるかもしれない。というのも今日は午前中に、「システマティックレビュー」のクラスがあり、そこで毎回出される課題はその日のうちに取り組むことにしており、その課題の分量を考えると、研究の文献調査まで手が回らない可能性があるからである。

早いものでシステマティックレビューのコースも今日が最終回となる。本日は、二人の担当教授に加えて、外部からゲストスピーカーがやっている。その方の専門はメタアナリシスであり、今日の話題はまさにそれである。ある研究テーマに関する既存の研究に対して、主に統計的な手法を用いながらどのように包括的なレビューを行っていくかが本日のトピックになる。

それを踏まえての今回の課題は最後の課題でもあり、これまでの課題で取り上げた一つの研究に対して、それがメタアナリシスの手順を適切に踏んでいるかどうか、どのような観点が欠けているのか、どのような観点が優れているのかについてレポートを書く。またそれに加えて、医学の研究分野ではメタアナリシスの基準がしっかりしており、その基準がどれほどまでに取り上げた教育研究に適用しうるのかという可能性、および教育研究全般にその基準がどれほど適用可能なのかについての考察をまとめていくことが求められている。それらの考察を記述するに際しての分量はそれほど多くはないが、一つ一つの問いと時間をかけて向き合う必要があるであろうから、今日の午後はこの課題をこなすことだけになりそうだ。

一日を通じて学術研究だけに従事するのではなく、文学作品を読んだり、作曲実践をすることも私の日々を形作る上で非常に大切であるため、今日の午後は上記の課題に取り組み、それが早く終わったとしても文献調査を行うのは明日にしようと思う。フローニンゲン:2018/1/16(火)06:18

No.650: To the Serene Wonderland

Have you ever felt as if you were standing just in front of a wonderland when you wake up in the morning? I always wake up in that way. The wonderland is serene. It exists for all phenomena to emerge. I feel that I'm in the wonderland today too. Groningen, 09:38, Monday, 1/15/2018

2016. 誕生地点から終着地点へ、そしてその向こう側へ

書斎の外の世界にこだまする音、書斎の中で広がる音楽の音に耳を傾けていると、音はどこから生まれ、音はどこに行くのか？という問いが自発的に生じる。その問いはどこか、私たちはどこから生まれ、私たちはどこに行くのか？と同種の問いのようにすら思える。音はどこから生まれるのだろうか。生まれた音はどこに向かっていくのだろうか。最近、そのようなことをふと考えることが多くなった。

音が誕生する瞬間、そしてそこから音が自己生成的に発展していく様子は、多くの驚きを私に与える。ある音は、確かにそれが生まれた瞬間からその音の存在を確かめることができる。しかし、そもそもその音が生まれるための前段階が存在しており、それは音のない無の世界だろう。

ある音の誕生地点までさかのぼってみると、果たしてその地点が本当にその音の誕生地点だと言えるのかどうか定かではなくなってくる。つまり、ある音の生誕地点とそれ以前との境目を断定することは極めて難しいということである。そうであれば、ある音というのはもしかすると、それが音として生まれて初めて存在を付与されているのではなく、もうすでにそれが誕生する以前の無音世界の中にその存在を認めることができるのかもしれない。

だとすると、音はいついかなる時もこの無音世界の中に溢れているということになる。もしかすると、この無音世界こそが音の源泉なのかもしれない。そしてそれは、音のみならず、全ての現象が生起する場だと捉えても何らおかしくはないと思えてくる。全ての存在が発露する場と、音が生誕する場は同じなのではないか。

この世界のありとあらゆる現象を生起させる目には見えない、無限の広がりと深さを持つ場の存在について思いが及ぶ。その思考のベクトルと逆向きに、音が向かっていく究極地点についても考えが及ぶ。つまり、音の終着地点についてである。そしてそれは、生命の命を含めた、現象の終わりに関する話と密接に関係している。音は生誕して以降、ある目には見えない力によって、その音のあるべき地点まで向かっていく。そして、その音がその地点に到着するとき、それはその使命を果たす。

終着地点がそれであるというのは誕生の瞬間から決まっているのだろうか、それとも様々な不確定な要素を含みながら、終着地点は変化しうるものなのだろうか。この点は、私たち人間の生涯とも関係しているように思えてならない。人生の出発から終着地点までの道のりについて。その主題と全く同じことを、今私は音楽を通じて考えているのかもしれない。

最後に一つだけ書き留めておきたいことがある。音は確かにある終着地点に到着した瞬間に、その役目を終える。つまり、音としての生命を終えるのである。しかし私はふと、それは果たして本当に

その音の生命の終わりだと言えるのだろうか？ということを考えていた。ある音がその使命を果たし
終える時、実はそこからさらに先にもその音の命が延びているのではないかと思うのだ。

音の表面上の完結は、実質上の完結ではない。音が外形上完結することによって、そこから新たに
宿る音の生命というものが存在しているような気がしてならない。これは音の不滅性と言えるだろう。
ある偉大な楽曲が多くの人に延々と聴き続けられることの背後には、こうした音の不滅性というもの
が存在しているのではないだろうか。そしてこれは紛れもなく、私たち人間の一生涯にも等しく当て
はまる。すなわち、人生の終着地点に辿り着き、外見上その人生に幕を閉じたことが終わりを指す
のではないのだ。

おそらく、その終着地点から先の人生がある。音の不滅性と同じ不滅性が私たちの人生にも内包さ
れているのである。私たちの人生における不滅なもの、それはその人が生きたという証を通じて現
れるだろう。

音の誕生とその終わり、生命の誕生とその終わり。音はどこから生まれ、どこへ向かうのか。私たち
はどこから生まれ、どこへ向かうのか。終着地点のその先に待つもの、広がるもの。

闇に包まれ、雨音が静かに聞こえる早朝に、私はそのようなことを静かに考え続けていた。それらを
考えさせてくれるきっかけを与えてくれたこの世界に、何かを返す必要がある。フローニンゲン：

2018/1/16(火)06:53

No.651: Research on Arts

While reading a book about arts and human development, my intention to conduct research on my
child's developmental process of arts arises. It doesn't matter to publish an article or not. I want
to observe my child as a research subject. Although I haven't had a child yet, I expect to
conduct such a study, playing with my kid in the world of art. Groningen, 14:45, Monday,
1/15/2018

今日は一日を通してとても不安定な天候だった。午前中、「システマティックレビュー」のコースの最終回のクラスに参加するために自宅を出発した時は、それまで降っていた雨が一旦止んでいた。ただし、外の寒さは厳しく、空は鬱蒼とした雲で覆われていた。ノーダープラントソン公園を横切り、キャンパスの入り口に辿り着くあと一步のところで急に雨が降り始めた。幸いにも入り口までが目と鼻の先であったため、折り畳み傘を広げることなく濡れずに入り口に入ることができた。

以前の日記で書き留めていたように、このコースのクラスは、教育科学棟の最上階である、通称「屋根裏部屋」と呼ばれる場所で行われる。屋根裏部屋に到着すると、そこにはマヨレイン・デヨンク教授とゲストスピーカーのアネリーケ・ロースト教授がそこにいた。

昨晚、もう一人の受講者であるジョージア人のラーナからメールがあった。何やら彼女は現在アムステルダムに滞在しているようであり、早朝のバスでアムステルダムからフローニンゲンに向かうが、クラスに間に合わない可能性もあるため、遅れる場合には連絡をよろしく、という内容のメールだった。

ラーナはジョージアの大学から交換留学でフローニンゲン大学に来ており、今学期を持ってジョージアに帰るそうだ。交換留学の最後の期間にオランダ国内を旅行しているようであり、来週も一緒に受講しているクラスがあるのだが、クラスの当日の朝に今度はパリからフローニンゲンに戻ってくるらしい。

結局ラーナは、バスの遅延のため、今日のクラスには顔を出さなかった。

システマティックレビューを取り扱う最後のクラスは、メタアナリシスに関する話題を議論した。ラーナが不在だったこともあり、受講者は私だけとなり、二人の教授を含め、三人でディスカッションを進めていった。

今後、システマティックレビューやメタアナリシスに関する論文を執筆することはないであろうが、それらの特殊な方法論を学べたことは今後の研究において間接的に大きな意味を持つだろう。とりわけ文献調査の進め方やその留意点について、以前にはなかった観点が獲得されたように思う。そ

れを示す証拠として、現在取り掛かっている自分の研究における文献調査の方法が以前のものと異なっていることを挙げることができる。端的に述べれば、以前よりもより体系的なアプローチを採用し、包括的な文献調査が実現されつつある。また、一つ一つの論文を精査する際にも、方法論上の問題点や種々のバイアスにも気づくようになっていく。この辺りの観点が獲得されたことは、このコースを受講したことの大きな恩恵だろう。

最終回の今日のクラスで得られたことはいつも通り多かったが、改めて、メタアナリシスを活用した研究に情熱を持っているロースト教授には頭が下がる思いだった。このような緻密なプロセスで膨大な文献を精査しながら統計処理を行っていくことは、私には到底無理なことのように思える。

研究者というのは、本当に各人様々な情熱を持っているものだとして改めて実感する。三人での議論に花が咲いていたため、二時間のクラスはあっという間に終了した。

今日はこれから、本日のクラスの内容をもとにした最終課題に取り組む。それが終わり次第、福永武彦氏の『忘却の河』の最後の章を読み、残りの時間は全て作曲実践に充てたい。フローニンゲン：2018/1/16(火) 16:23

No.652: The Ultimate Meaning of Human Development

The profound meaning of human development might be the process of living by manifesting ultimate truth, goodness, and beauty. I came across this notion by chance. My gut feeling tells me that it is a perfect comprehension. Groningen, 14:52, Monday, 1/15/2018

2018. 教育研究の動向

今朝は早朝からみぞれ混じりの雨が降っている。思い出してみると、昨日も突発的に激しいみぞれ混じりの雨が降っていた。幸いにもその瞬間には、私は部屋の中にいたが、横殴りに降りつけるみぞれの激しさは圧巻であった。今この瞬間もみぞれが窓ガラスに激しくぶつかる音が聞こえる。

天気予報を確認すると、どうやら今日と明日は雨と雪の双方が降る可能性があるらしい。そして、これから一週間はまた冴えない天気が続くようである。日本で経験した晴れ続きの日々は懐かしく、オランダに戻ってきてから数日間ほど続いていた晴れの日も懐かしい。

昨日は夕方から夜にかけて、「システマティックレビューの執筆方法」のコースの最終課題に取り組んでいた。最終課題はメタアナリシスに関する四つの問いから構成されており、それぞれの問いに対して自由記述で回答する。それらの問いに加えて、今回の課題で取り上げたシステマティックレビューの論文が、厳密なメタアナリシスに要求される27個の項目を満たしているかどうかをチェックすることも課せられていた。まずはその検証に取り掛かり、その後四つの問いに答えた。

以前に言及したように、複数の研究成果を統計的処理によって包括的な知見に昇華していくメタアナリシスは医学の分野に起源がある。新しく開発した薬や治療方法が果たしてある病気や症状に真に効果があるのか、というのは医学研究において最も重要な観点だろう。

新薬や新しい治療方法の効果の検証をする際に、例えば米国であればFDAなどに新薬や新しい治療方法の登録をし、その効果検証の結果を報告する必要がある。そのため、FDAのデータベースを見てみると、そこには膨大なデータがある。もちろん全ての医学研究に該当するわけではないだろうが、多くの医学研究は一定の基準をクリアする形でFDAなどの機関に申請し、その効果検証の結果を報告する義務があるようなのだ。こうした事情もあり、FDAなどのデータベースを活用すれば、一定基準をすでにクリアした多くのデータが入手でき、メタアナリシスも行いやすい。

一方、教育研究においては、新しい教育手法の質を事前に検査した上で何らかの機関に申請・登録し、その効果検証の結果を報告することは義務付けられていない。そうした事情もあり、かなり劣悪な実証研究の論文が世に出回っていたり、データが分散してこの世界に存在していたりする。教育研究のメタアナリシスの質が医学のそれに比べてまだまだ十分なものではないのは、こうしたところにも理由があるだろう。

新薬や新しい治療方法が人命に関わるのと同様に、新しい教育手法は人の脳や心、あるいは身体にまで影響を及ぼすものである。そしてその影響は、その人の人生を左右するものになるかもしれない。そうしたことを考えてみると、教育研究においても、研究の質を管理するような機関が必要になるのではないだろうか。もちろん、有名なところで言えば、教育科学者のロバート・スレイヴンが立ち上げたグループを含め、その他にもいくつかの団体が教育研究の質の調査を行い、データベースを持っている。ただし、今のところ、教育手法の効果を調査する研究はそれらの団体への登録を義務付けられているわけではない。こうした動向についても昨日のクラスの中で議論をした。

当初の計画よりも少しばかり時間がかかったが、夕食後に課題を終わらせることができた。そこから福永武彦氏の『忘却の河』の最終章を読み終え、就寝前に少しだけ作曲実践を行った。

昨日の振り返りをしていると、早朝から降り続けていたみぞれ混じりの雨は一旦止んだようだ。これから今日の仕事に取り組みたい。フローニンゲン:2018/1/17(水)07:20

No.653: Progress of My Research

I had a research meeting today, which helped me elaborate my research idea. The last thing I have to do is to determine what kinds of metrics I will use with justification.

The most important candidate is the number of course relevant concepts. Another was sentence length in a sentence of a lecture, but my supervisor gave me advice on using a more attractive metric. It would be non-verbal aspects of lectures, for instance pacing.

Since I want to compare both lectures and learners' online comments with the same metrics, I have to find a proper metric with justification based on literature. Stop words in a sentence might be a promising metric in terms of the contrast with course relevant concepts.

Tomorrow, I'll search for some literature on stop words as a new candidate for my metrics.

Groningen, 17:33, Monday, 1/15/2018

2019. 静謐な感覚

起床して一つの日記を書き留め、コーヒーを入れにキッチンに向かった。その時横目で食卓の外
の景色を眺めると、地面がうっすらと雪に覆われているのを確認した。暖房が効いているはずなの
に、今朝はいつもより寒さを感じると思ったのは、やはり外気がだいぶ下がっていたためだろう。

今日は夕方から、「応用研究手法」のコースのクラスに参加する。このコースも今日を含め、あと二
回ほどのクラスとなった。今日のクラスに向けて、このコースを担当するロエル・ボスカー教授から昨
年の最後のクラスで手渡された論文を読んでおく必要がある。この論文に関しては、年末に一度中

身をざっと確認した程度であるため、昼食の前後にこの論文の重要な箇所を中心に再読しようと思う。

昨夜は何か記憶に残る印象的な夢を見ていたはずなのだが、その内容を思い出すことができない。夢の内容を思い出せないというのはもしかすると、その夢の意味を咀嚼できる段階に自分がまだいないということもありうるのではないかと最近思う。あるいは、夢が顕在意識下の自分にとって向き合いたくないようなものである場合、無意識はそれを夢として開示しながらも、開示を終えたらまた蓋をしてしまう、ということもありそうだ。いずれにせよ、今日の夢がまた形を変えて現れてくることを願う。

昨日の朝もそうであったが、今朝も目覚めた瞬間に、自分がとても静かな世界への入り口に立っているような感覚がした。その感覚についてはすでに曲として表現している。起床直後の自分を包むこの感覚に意識を向けてみると、どうやらその静謐な世界は、すべての現象を生み出す場所だといえることが見えてきた。その世界は、自分の内側の諸々の内的感覚や、世の中の諸々の現象を生み出す場所として存在している。その世界は、全ての現象を生み出す場所として存在しているがゆえに、全ての現象を超越している。この超越性が静謐な感覚を生み出しているのかもしれない。

最初にその感覚と遭遇した時、私はそれを、肯定的でも否定的でもない中立的な静けさだと受け取っていた。しかし、その感覚に深く沈み込んでいくと、それは中立的というよりもむしろ、超越的な静けさと呼んだ方がふさわしいように思えてきたのである。全ての現象の生成を司るその場所は、現象の間に中立的に立っているのではなく、超越した形で広がっている。そうした考えから、その感覚は超越的な静けさと呼べるようなものだと思う。

今日の目覚めの際にも感じていた超越的な静けさは、今もまだその感覚が自分の内側に残っている。フローニンゲン:2018/1/17(水)07:43

No.654: Candidate Metrics

Because the fractal dimension of the variability of sentence length might have an effect on learning processes and outcomes, I'll keep the metric even though it looks too simple. So, I'll utilize three metrics in total; sentence length, course relevant concepts, and stop words. I'll find

some literature of the effect of stop words on learning processes and outcomes. Groningen, 18:03,
Monday, 1/15/2018

2020. マルチレベル分析

大学のキャンパスから戻ってくるなり、激しいみぞれがまた降り始めた。今日は本当に変動の激しい天気だった。断続的にみぞれ混じりの雨が降り、非常に不安定な天候であった。

幸いにも、夕方に大学の講義に出かける際には、幾分晴れ間が覗いていた。そして、キャンパスから自宅に戻る最中も雨に見舞われることはなかった。私の日々の生活は何かに取り憑かれているかのように営まれているが、幸運が日々の生活を取り巻いていることも確かだろう。

今日は夕方から、「応用研究手法」のコースのクラスに参加した。新年最初のクラスということもあり、コースを担当するロエル・ボスカー教授ともう一人の受講者であるジョージア人のラーナと共に年末年始の話をまず共有した。ボスカー教授は学会に参加するために、ドバイとシンガポールを訪れていたそうだ。どちらの国も気温は暖かく、シンガポールはむしろ暑いぐらいだったそうだ。

ボスカー教授は私たちに、ドバイにある800mを越す世界で一番高いビルを撮影した動画を見せてくださった。これほどまでに高層のビルが存在していることを私は知らず、ここまでの高さになるともはや常軌を逸しているように思えた。

ラーナはイタリアを訪れたようであり、イタリアの主要都市を含め、なんと六つの都市に滞在していたそうだ。三人に共通していたのは、オランダよりも暖かい場所で年を越し、オランダよりも晴れの日が多い場所で日々を送っていたということだった。

やはりこの時期のフローニンゲンの鬱蒼とした空模様と寒さは、相当に特殊な環境条件であり、それが精神に特異な影響を及ぼすことは明らかだろう。

最初にお互いの近況を共有し終えた後に、今日のクラスの本題に入った。今日は、「マルチレベル分析」という手法について、その概要と活用事例を学んだ。この分析手法は特に教育学や社会学

の研究で用いられることが多い。というのも、両者の分野はともに、学校や組織などの集団とそこに属している個人との影響や相互作用を調査することが多いからである。

「マルチレベル」という言葉の由来の一つは、まさに研究対象がマクロなレベルとミクロなレベルにまたがっていることが挙げられるだろう。これまではマルチレベル分析が活用された論文を何気なしに読んでいたが、ボスカー教授の説明を受けると、随分と奥の深い手法だということに気づかされた。

ボスカー教授がとりわけこの分析手法を気に入っているためか、説明もいつも以上に熱が入っていたように思う。私の今後の研究にこの手法を活用するかは定かではないが、今日の講義で得られた知識は、この手法を用いている論文を今後読み解いていく際に非常に役立つだろう。フローニンゲン:2018/1/17(水)18:35

No.655: Transcendental Tranquility

I often have a neutral silent feeling that is neither positive nor negative. It could be better to call it transcendental tranquility rather than neutral silence. Groningen, 08:05, Tuesday, 1/16/2018